

【関連文化財群1】

丘陵地に生える湿地の植物

四日市市の丘陵地には、湧水によって成立する比較的小面積の湿地が多数あります。その多くが、500 万年前から 80 万年前まで存在した東海湖の堆積と関係しています。これらの湿地には、東海地方の固有種をはじめとする、湿地の珍しい植物が多数生育しています。これらの湧水湿地は、里山の自然として、古くから人間活動との密接な関係の下、盛衰を繰り返してきました。

○豊富な湧水

東海地方には、弱酸性・貧栄養の湧水により形成された比較的小面積の湧水湿地を中心に多数の湿地が分布します。このような湿地には、地域の固有種や絶滅危惧種が多数自生しています。東海地方には、伊勢湾沿岸に特徴的に分布するイヌナシ・シデコブシ・ヘビノボラズ・シラタマホシクサ・トウカイコモウセンゴケなど固有・準固有の植物があり、四日市市内にも、国指定天然記念物「東阿倉川イヌナシ自生地」「西阿倉川アイナシ自生地」・県指定天然記念物「川島町のシデコブシ群落」・市指定天然記念物「桜町シデコブシ群落」など、複数の生育地があります。また、国指定天然記念物「御池沼沢植物群落」をはじめとする湧水湿地には、これら東海地方の固有種だけでなく、ミズギボウシ・サワシロギク・キセルアザミなど、レッドデータブックに掲載されているような絶滅危惧種をはじめとする湿地の植物が多数生育しています。

また、御池沼沢植物群落は、暖地性のミクリガヤと寒地性のヤチヤナギが共存しているなど、過去の気候変動や地層の堆積が植物群落成立に大きな影響を及ぼしていることがわかる、植物地理学上貴重な湿地です。

○湧水湿地が成立する地質・地形

湧水湿地が成立する地層の多くは、500 万年前から 80 万年前まで存在した東海湖の堆積と関係しています。東海湖の堆積は、粘土層と砂礫層の互層になっており、崖や段丘地形でこの堆積が露出している場合に、透水層である砂礫層からの湧水により湿地が成立します。東海湖の堆積は、四日市市内の広い範囲に広がっており、市内の各所で露頭や湿地を確認することができます。

○植物が持続して生育する人為的な要因

湧水湿地に生育する植物は、貧栄養環境に生育するため、ほとんどが小型の植物で、他の植物の進出、土砂流出や、人間の活動による環境変化の影響を受けやすいものです。湧水湿地の多くは、集落に近接する里山自然の一部であり、湿地に生育する植物や動物が生活資源として利用され、適度なかく乱により生育環境が保たれた場合には、植物群

落が維持される場合もありました。「御池沼沢植物群落」なども、元々13ha に及ぶ大きな池で、生育するヨシやアンペライが生活資源として利用されていました。

【関連文化財群2】

朝明郡の郡家の成立と古代の地方社会の発展

「古代のロマンを感じる史跡と神社・寺院」

古代の四日市は、北部は朝明郡、南部は三重郡に属していました。

久留倍官衙遺跡は、朝明郡の役所の遺跡であり、古代律令国家の地方支配体制を具体的に示すものとしてきわめて重要です。また、壬申の乱や聖武天皇東国行幸に関わる古代史を語るうえで重要な歴史上の舞台となりました。

その他、智積廃寺跡は壬申の乱のとの関わりが指摘され、また、古代の地方社会の様子が見られる遺跡が多くあります。

朝明郡は、平安時代の「延喜式」に名前があげられている神社が伊勢国で3番目に多く、24座あります。そのうち、耳常神社は朝明郡司船木氏との関わりがあり、船木氏は垂坂観音寺の創建にも深く関わっているとされています。

○久留倍官衙遺跡

久留倍官衙遺跡は、朝明郡の役所の遺跡であり、古代律令国家の地方支配体制を具体的に示すものとして極めて重要です。伊勢湾を望む丘陵東端に位置しています。

また、壬申の乱や聖武天皇東国行幸に関わる古代史を語るうえで重要な歴史上の舞台となりました。久留倍官衙遺跡周辺には、古代の朝明郡下で繁栄をもたらす地方社会が形成されていきました。

○壬申の乱

「日本書紀」によると、大海人皇子（後の天武天皇）が壬申の乱の際に、迹太川の辺りで天照大神を遥拝して戦勝祈願し、朝明郡家に立ち寄ったとされています。現在も遥拝所跡として伝えられる史跡が多くあります。また、壬申の乱の功績として智積廃寺は、壬申の乱の功績の証として、天武天皇からの援助で建立されたと考えられています。その後の古代の仏教文化の広がりにつながったと考えられます。

○聖武天皇東国行幸

聖武天皇の東国行幸の際には、朝明郡に入り2泊しており、『万葉集』には現在の四日市市域で詠まれたとみられる歌が4首収載されています。『続日本紀』には「朝明郡」と記し、『万葉集』には「朝明行宮」「狭残行宮」と記載されています。

○現在に伝える古代朝明郡の歴史

朝明郡の古代社会の様子を現在に伝える遺跡が多くあります。また、平安時代の「延喜式」に名前があげられている神社は朝明郡内には、24座が存在し、各地区に見られます。

郡司であった船木氏にかかる文化財も多く残ります。若き日の慈恵大師が大乗受戒で伊勢を行脚中、朝明郡の領主舟木良見の帰依寄進をうけ、延長6年（982）垂坂山に堂塔を建てたのが、観音寺の由緒と伝えられます。また、延喜式内社でもある耳常神社は、船木氏の祖先神である「神八井耳命」を祀ったといわれています。

【関連文化財群3】

中世の城館「室町・戦国時代の赤堀三家と北勢四八家の胎動、信長侵攻の火勢」

平安から鎌倉時代には伊勢平氏の活躍の舞台でしたが、南北朝、室町時代になると、様々な武将が入り交じって城を築きました。市内には、38カ所の城館が存在したといわれています。京都や伊勢など様々な地域へとつながる道があったこの地は、戦略上重要な場所でした。織田信長の北伊勢侵攻によりほとんどが滅ぼされ、あるいは軍門に下りました。

○戦乱の始まり

平将門乱の後、伊勢国に定着した伊勢平氏が統治していました。伊勢平氏が蜂起し、討伐に向かった鎌倉幕府軍の平賀朝雅が、元久元（1204）年4月10日から12日の間に反乱軍を鎮圧したことから「三日平氏の乱」と称されます。

また、南北朝時代には南朝の任命した国司と、北朝による守護との対立が生じ、大矢知砦、垂坂山古戦場、岡山古戦場などは戦いの場となりました。南朝側に屈し、北朝側は全滅しました。

○北勢四八家の胎動

中世時代、伊勢地方では、大きな勢力の武将は存在せず、四十八家といわれる小規模の城主・豪族が争いを繰り返していました。

○赤堀三家による統治と四日市の起こり

四十八家の中でも、四日市の歴史の上で重要な役割を担ったのは赤堀三家です。

応永年間（1394～1428）、田原孫太郎犬景信が上野国赤堀庄から移り赤堀城を築きました。景信は、長男の盛宗を羽津に、次男の秀宗を赤堀に、そして三男の忠秀を浜田に配しました。文明年間に三家に別れ、赤堀三家は、北勢地方で勢力を誇りました。

三男の忠秀は、浜田城を現在の鶉の森公園に築き、城の西方にあった東海道を海に近い東に移して交通の便を図りました。また市場の整備を行い、毎月4の付く日に市場を開催し、四日市の名の起こりと言われていています。

○地形を活かした築城

この時代の多くは、周囲に空堀を巡らせ、土塁で建物の周りを囲んだもので、周囲が見渡せる小高い山や丘の上に築城されました。用水や水運を通じて、川筋・流域は重要な意味があり、流域の岸丘陵上に濃密に連なって築城されています。一方で、富田城や蒔田城などの平城もあります。

朝倉氏一族の城跡が4カ所あります。後藤氏が築城した采女城周辺には、菩薩時である成満寺や、それぞれの城跡の周辺には城下が形成され、現在も城主等に関連する文化財が残っ

ています。

○織田信長の北伊勢侵攻

織田信長の北伊勢侵攻により、家臣滝川一益により多くの城館や寺院が焼き討ちにされました。

富田の一本松は、軍勢の上陸の目標にされたといわれます。また、経塚公園は兵火によって焼失したと言われる西徳寺の僧が、経典の消失を憂い、大般若経を埋納したと伝えられています。

日永は、滝川一益の支配下となり、母の隠居所を実蓮寺に建築しました。日永つんつく踊りの起源は、隠居所の建築の地固め工事にうたった歌謡と動作を取り入れたという説と、田畑を流失する農民の困窮を見て、天白川の堤防を築くための地固め、地つきにうたったとする伝承もあります。母堂の墓を五輪塔にして実蓮寺に祀りました。

【関連文化財群 4】

「近世東海道と四日市宿」

四日市市域においては、東海道が平野部を南北に貫きます。近世には、四日市は東海道 53 次のうち 43 番目の宿場町として栄え、参勤交代や伊勢参宮など、人・物の往来が活発でした。

伊勢参宮道への分岐点となる日永の追分には間の宿があり、京へ上る人や伊勢参りに行く人で賑わい、旅人のお土産となった日永うちわなど、地場産業も盛んになりました。また、八風道や菰野道など、周辺地域へとつながる重要な街道の起点となりました。

街道沿いに点在している、近世東海道および四日市宿に関連する文化財群を、一連の文化財として捉えます。

○東海道の街道景観

街道沿いには、町家形式の歴史的建造物や街道松などが残っており、歴史的な街道景観、町並みを見ることができます。

また、川と交差する箇所では、川を取り込んだ景観が形成されています。橋のたもとには常夜燈や道標が置かれ、歴史的な伝承が伝えられる橋などの構造物もあります。現在も、さくら祭りなど、地域住民により川を活かした景観づくりが行われています。

○寺社と祭礼行事

街道沿いには多くの寺社が建ち、近世以前からの四日市の成り立ちを伝えます。寺社は信仰の拠り所となり、祭礼行事が生まれました。

諏訪神社の祭礼である四日市祭では、大入道や鯨船など多彩な形態の山車が出されます。山車は氏神として祀る町場や東海道沿いの村から山車がでていました。桑名から伝わった石取祭りなど、街道の交流から生まれた祭礼行事ということができます。

○人々の往来と産業の発展

街道沿いには一里塚や道標などの石造物が多く残っています。また、街道の風景は、浮世絵などにも描かれ、現在に伝わります。

人々の活発な往来があったことで、地域の中で多様な生業が生まれ、盛んになりました。うちわや醸造、製麺などの地場産業のほか、団子や餅など、旅人が立ち寄り、賞味したり、お土産として買われたものが今も残ります。

また、市が開かれたのも四日市の特徴で、現在まで続いているところもあります。

○現在に伝える施設

街道沿いには、歴史文化を現在に伝える施設が整備されています。市立博物館だけでなく、

市街地や内部、それぞれの地区で歴史文化の特色を活かして情報発信されています。

【関連文化財群5】

産業都市四日市の礎となった近代産業

幕末から近代にかけて、四郷地区では、製糸、製茶、醸造、その他関連産業が盛んになり、四日市港の発展や鉄道による輸送力の増強に伴い、本市の近代産業発祥の地として栄えました。伊藤小左衛門や伊藤伝七は、工場の機械化や海外への輸出など産業の近代化という流れを読み取り、渋沢栄一の支援を得るなどして事業を拡大し、興したいくつかの企業は現代にも継承されています。また、学校の創設や役場建設の寄附などでも地域社会に大きく貢献したことから、今でも住民に敬われる存在となっています。

○近代産業の発祥：先覚者小左衛門・伝七と近代産業の起こり

伊藤小左衛門は庄屋農家に生まれ、伊藤家の家業である醸造業を営んでいました。明治になり横浜が開港すると、外国へのお茶や生糸の輸出が盛んになると考え、明治7年(1874)に器械製糸を開業し、富岡製糸場での視察を重ね、三重県最初の蒸気汽缶を取り入れ、良質の生糸を生産、輸出するまでになり、お茶の工場生産の開始とともに、近代産業の祖と評されています。

伊藤伝七は、明治15年(1882)に川島紡績を設立し、その後、渋沢栄一の援助を受け三重紡績会社を発足させました。大正3年(1914)に大阪紡績と合併して東洋紡績株式会社を設立し、東洋一の紡績工場と称されるまでになりました。

二大先覚者の功績により、四郷は近代産業発祥の地として、製糸・製茶・醸造、及びそれらの関連産業が盛んになり、三重を代表する経済・文化の栄える村となります。現在は、神楽酒造、田中酢店、ヤマコ醤油、白梅など当時の会社や建物が残り、町並みの歴史的景観を形成しています。

近代の産業の興隆がこの地域に新たな歴史文化を加えることとなり、現在にも伝わっています。5世伊藤小左衛門は法蔵寺本堂を寄進、また、自宅で始めた私塾の笹川学校は、現在の市立四郷小学校です。10世伊藤伝七(貴族院議員、東洋紡績2代目社長)は、郷土への恩返しにと6万円という大金を寄付し、1921年(大正10)に四郷村役場が建てられました。現在、地域の歴史を伝える四郷郷土資料館として活用されています。また、村人の働く場として、村内に工場を積極的に建設したと言われています。

○近代四日市港の発展

四郷で近代産業が発祥した背景には、幕末の開国で生糸と茶の輸出が盛んになったことがあります。幕末から明治にかけて、海上交通において、四日市が江戸と上方の中間に位置するという地の利もあったことから、四日市港は伊勢湾内における最大の商業港として、船舶の出入りや旅客の往来、物資の集散が盛んでした。伊藤小左衛門や伊藤伝七はそこに着目し、製糸や紡績、製茶の工場建設を促進しました。

四日市港は、安政の大地震（1854）により水深が浅くなり船が入港できなくなるなどの大きな被害を受けます。廻船問屋を営んでいた稲葉三右衛門は私財を投げうち、明治6年（1873）から10年以上の歳月をかけて修築に取り組み、今日の四日市港の基礎を築きました。しかし、明治20年代初めに相次いだ暴風雨で港が損壊したため、同26～27年（1893～1894）に修築工事が行われ、それが今に残る潮吹き防波堤などの旧港港湾施設です。

四日市港はこのような修築、拡充工事を経ながら、明治22年（1889）に特別輸出港に、市制が施行された同30年（1897）に特別輸出入港に、同32年（1899）には開港場の指定を受け、国際貿易港となりました。後背地には繊維産業が発達し、我が国の羊毛、綿花の代表的な輸入港となるとともに、生糸、魚網、陶器、セメントなどを輸出しました。

明治前期には、伊藤伝七の別邸が港近くに建設され、強い繋がりをみることができます。

○近代輸送の発達 ～北勢の鉄道史～

北勢地域においては、関西鉄道（後に国有化され、現在のJR関西本線）が明治21年（1888）に四日市に設立され、2年後には草津－四日市間が開通します。その後に整備されていった四日市市の鉄道網は、産業関連輸送が主目的だったことが特徴です。

伊藤製糸の工場があった四郷村八王子と四日市市を結ぶことを目的に、今の四日市あすなろう鉄道八王子線である三重軌道が大正元年（1912）に開業しました。その支線（鈴鹿支線）として、大正11年（1922）1月に日永・小古曾間が開業し、同年6月に内部まで延伸され、現在のあすなろう鉄道内部線も開通しました。なお、あすなろう鉄道は、当時の軽便鉄道の線路幅（762mm、ナローゲージといいます）のまま、現在も運行されています。また、四日市港へのセメント輸送を主目的として、昭和3年（1928）に三岐鉄道が設立され、3年後には三岐線（富田～西藤原駅）が開通しました。

また、四日市が産業の中心地であったことにより、市内にはいくつかの鉄道事業者の本社が設立され、鉄道が開業しています。四日市鉄道は大正2年（1913）に現在の近鉄湯ノ山線を開業し、伊勢電気鉄道が四日市－津間を大正13年（1924）に開業、のちの近鉄名古屋線となります。

○近代産業の広がり と現代の企業へのつながり

四日市港や近代輸送施設の発達とともに近代産業は市域に広がり、四日市市内には、各地で近代産業遺産を見ることができます。発展著しい紡績関係では、当時日本一の規模を誇った東洋紡富田工場の倉庫建物や、豊かな地下水を利用した醸造場は四郷のほか、楠、桜、川島、大矢知、日永などにみられ、富田の魚網生産や水沢地区などの伊勢茶の生産は今に継承されています。

小左衛門や伝七が関わって興された会社は、東洋紡（旧川島紡績）や日本トランスシティ（旧四日市倉庫）、住友電装（旧東海電線製造所）、三重銀行（旧四日市銀行）など、現在の企業へと繋がっています。

【関連文化財群6】

奇祭！鯨船行事

本市を中心とした北勢地方に分布する陸上の模擬捕鯨行事です。鯨を豊饒の象徴とみなし、これを仕留める演技を行うことによって大漁や富貴を祈願した行事です。富田地区の鳥出神社の鯨船行事はユネスコ無形文化遺産に登録されており、中部地区、塩浜地区、楠地区に伝わります。市外では唯一、鈴鹿市にも伝承されています。

○鯨船行事

全国的にみても北勢地域でのみ行われている鯨船行事は、捕鯨の様子を陸上で再現したもので、大変珍しい行事です。しかし、伊勢湾奥の沿岸にあたる当地域で、迷い込んだ鯨を捕らえることはありましたが、捕鯨が盛んだったという記録はありません。

鯨船行事が継承されているのは、四日市市内では、富田地区の「鳥出神社の鯨船行事」（国指定重要無形民俗文化財）に鯨船山車が4艘（北島組神社丸・中島組神徳丸・南島組感應丸・古川町権現丸）、中部（港）地区の南納屋町に「鯨船山車（明神丸）」（三重県指定有形文化財）の1艘、同じく中部（共同）地区の本町に「新勢州丸」の1艘、市南部の磯津町に「磯津の鯨船行事」（市指定無形民俗文化財）の1艘（大正丸）、楠町南五味塚に「南楠の鯨船行事」（市指定無形民俗文化財）の1艘（龍神丸）、計8艘があります。市外では、鈴鹿市の北長太町に「天王丸」（鈴鹿市指定無形民俗文化財）の1艘があります。また、これら北勢の鯨船行事と県南部の尾鷲市「梶賀のハラソ祭り」（海上での捕鯨行事）は、捕鯨に関する貴重な民俗文化財として国選定保存の無形民俗文化財となっています。

山車は、1艘作り上げるために莫大な経費を必要とします。そこで、昔は、山車を作り替える際に古いものは他所へ有償で譲渡することがよくあり、明治から大正の時代に、南楠の龍神丸は南納屋の明神丸を、磯津の大正丸は市街地の袋町にあった正一丸を購入したものです。そのため、船名に1字、同じ字が使われています。

本町の新勢州丸は、元は塩浜の七ツ屋町にあったものですが、行事が長く休止され山車を処分することになったことから、それを憂いた本町の有志の方々が引き取り、行事を受け継ごうとしています。なお、新勢州丸も、その由来は、港地区の北納屋町の勢州丸を伝承したものです。こうして山車が引き継がれ行事が伝播していく一方、大元の袋町の正一丸と北納屋町の勢州丸は、残念ながら戦災で焼失してしまいました。

○鯨船の不思議

捕鯨を主な生業としていなかった北勢地域に、なぜ鯨船行事が起こったのか、理由ははっきりとしていません。

鯨船行事との関連をうかがわせるものが鳥出神社にあります。天明元年（1781）に神社に奉納された2隻の「御座船模型」（市指定有形民俗文化財）です。御座船とは、江戸時代に

西国大名が参勤交代の際に使用した装飾的な船です。奉納されてから鯨船行事が始まったとの伝承もあります。鯨船行事の飾りや屋形、鯨船歌などは、実際の捕鯨船より御座船に近いイメージで、関連性があることが指摘されています。

さらに、江戸幕府の八代将軍徳川吉宗が紀州藩主であった18世紀初め頃、松坂の紀州藩領に捕鯨を行わない軍事教練のための「鯨組」が置かれていたことや、伊勢湾を紀州藩の御座船「万歳丸」等が航行していたことが影響しているのでは、という説もあります。また、幕府や一部大名が行っていた「御船祭(みふねまつり)」との関係を指摘する説もあります。

始まりについては謎ですが、鯨は、その大きさや捨てる場所がないことから古式捕鯨の昔より、「鯨一頭七浦潤う」といわれ、多くの人びとに富を分配してきました。鯨船行事は、鯨を大漁や富貴の象徴として、古式捕鯨を祭礼の風流(ふりゅう)の中に取り入れたものとして、民俗学的に注目されます。

○ストーリーのある行事

鯨船行事には、山車の曳き回しにストーリーがあります。「流し唄」を唄いながら鯨を捜し、ハダシ(ハタシ、ハザシと呼ぶところもある)という踊り子(オドリコ)が沖の鯨を見つけると唄が「役唄」に代わり、唄や太鼓に合わせて逃げる鯨を追いかけます。追い詰められた鯨は反撃に転じ、鯨船は後退させられます。何度か攻防を繰り返し、最後には見事に鯨を銚で突きます。このようなストーリー性のあるところも、この行事の特徴であり見どころといえるでしょう。

○鯨船山車のちがい

一見同じに見える鯨船山車ですが、それぞれに特徴があり意外に違っています。

大きさや船の構造も少し異なっていますが、その装飾の違いに注目してください。豪華な装飾でもっとも目を引かれるのは船体の横腹を飾る「横幕」でしょう。どれも赤い生地に金糸で刺繍が施されています。富田の鯨船では、北島組神社丸は波間の鯨と飛び交う千鳥が描かれ、朝の豊饒な海を表現しています。中島組神徳丸は波間の龍が描かれ、昼の風の海を表し、南島組感應丸は大波と龍が描かれ、夜の荒々しい海をたてがみを振り乱しながら渡る様子が表現されています。古川町権現丸は波と千鳥が描かれ、穏やかな海を表しています。

南納屋町明神丸の横幕は、夫婦岩や波の刺繍が施され、彩りも豊かです。磯津の大正丸や南楠の龍神丸は波と龍の刺繍が施され、さらに大正丸には船名の文字も刺繍されています。

他にも、船上に載っている屋形の屋根の意匠や舳先にぶら下がっている水押(みよし)下がりなど、それぞれの鯨船に特徴があります。

○ユネスコ無形文化遺産に登録

国指定重要無形民俗文化財である「鳥出神社の鯨船行事」は、平成28年12月1日(ユネスコの会議場所であったエチオピアの現地時間では11月30日)に、全国33カ所の「山・

鉦・屋台行事」のひとつとしてユネスコ（国連教育科学文化機関）無形文化遺産に登録されました。

ユネスコ無形文化遺産登録とは、無形文化遺産の保護やその重要性に関する意識の向上などを目的に、平成 18 年に発効した「無形文化遺産保護条約」に則り、「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に掲載されたということで、世界的に貴重な祭礼行事であるとみとめられたことになります。建築物や自然分野で登録される「世界遺産」の、いわば無形文化財版です。これまでに、能楽や歌舞伎、和食や和紙などが登録されており、直近では「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が令和 2 年 12 月に登録されました。

【保存活用区域】

○四郷の歴史文化

近世までの四郷は農村でした。四郷の地に14世紀に設けられた伊勢安国寺は、延暦19年（800）創建の五位鳥山西明寺を改称してあてたと伝わり、歴史ある寺院でしたが、元龜3年（1572）に織田信長の家臣滝川一益によって焼失したとされています。兵火を逃れた総持庵をあてたと伝えられる顕正寺には、安国寺に安置されていた仏像の一部が残ります。日野神社は、安国寺内の守護神であったとされています。顕正寺、日野神社、西覚寺では400年続く大念仏が行われており、その他、虫送りや獅子舞など、多様な祭礼行事がこの地域で継承されています。